

0 - 庭について考える -

庭とはどんな存在だろうか？

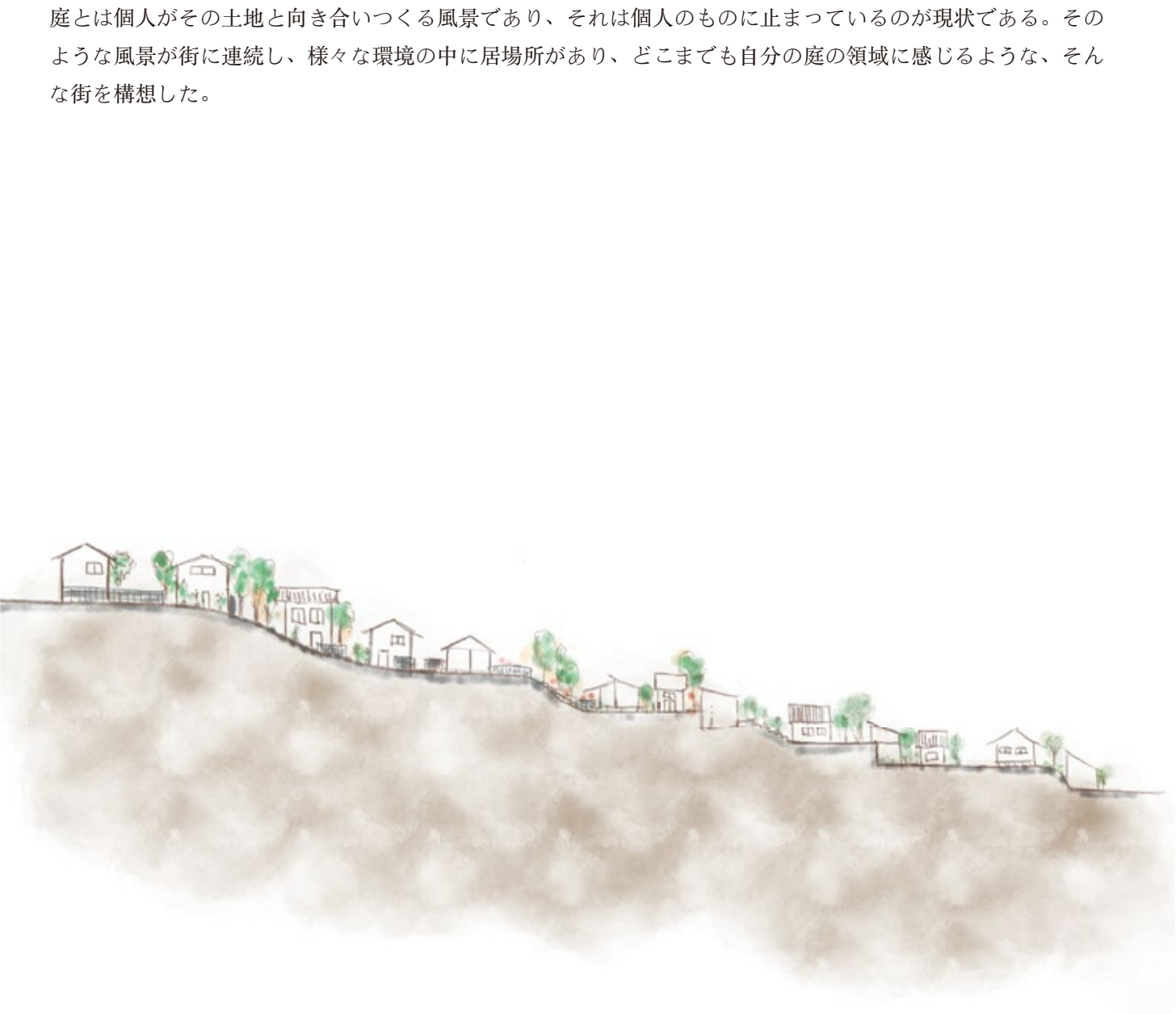
ただ眺めたり、石を置いたり、植物を植えたり、土を盛ったりなど理想に向かって土地と対話するかのような風景だ考えた。庭をもちその土地との応答を繰り返すことでその場所に対して愛着を持つことができると考えた。

1 敷地（エリア） 東京都豊島区駒込



2 園芸のまち 駒込

江戸時代には広大な土地を持つ大名の屋敷があり、その庭園をつくるために植木屋が多く存在した。現在の染井通りには多くの植木屋があり、当時は日本最大の植木・花卉のセンターであったと言われている。植木屋も自分の屋敷に多くの苗木を植え、それを育てて売っていた。



(1) 受け継がれる精神

庭の街としてのアイデンティティは今でも引き継がれ、江戸にこの地で生まれたソメイヨシノを街の木として育てたり、各所に花を植えたりなど、街の景観デザインに生かされている。

染井吉野桜の里公園



銀行跡地に住民と行政が話し合って作られた公園。染井の桜を発信するため、街に桜を咲かせるために苗木が育てられている。育てられた苗木は地元の小学校や、地域の街路に植えられる。住民が主体となって育て管理している。

染井霊園



もともと武家屋敷であった場所を、公共の墓地に変えて、もともとあった桜や個人が自分の墓地の周りを手入れて美しい風景が作られている。

3 変遷 - 開発により失われてしまった庭

江戸時代

通り沿いに植木屋が並び、その奥に苗木を育てる庭を持ち、その奥には斜面状の緑地と谷を挟んで向かいの山からの借景があった。街一帯が自然に覆われていた。



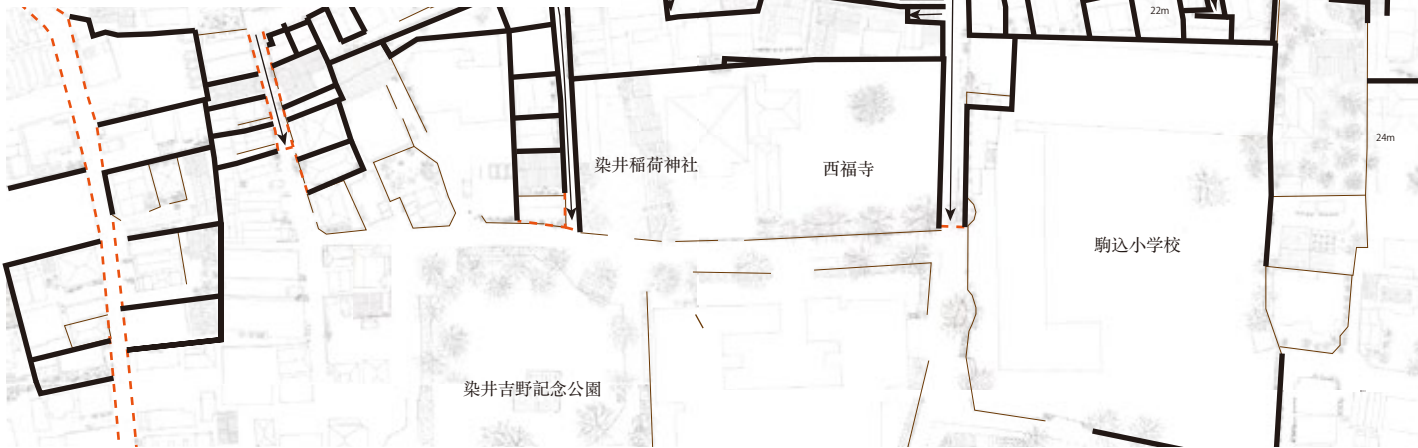
現在

戦後に住宅の開発が進み、もともとできていた庭の風景は失われ、個人が塀で囲った狭いに敷地に小さな庭を持つような風景に変化した。

4 リサーチ

(1)崖をこの街のコモンズとして捉える-

この街には宅地開発によって生まれた擁壁が街中に広がっている。皆が家の領域内に持つものとして広がっていて、ある種の共通感覚をもたらしている。



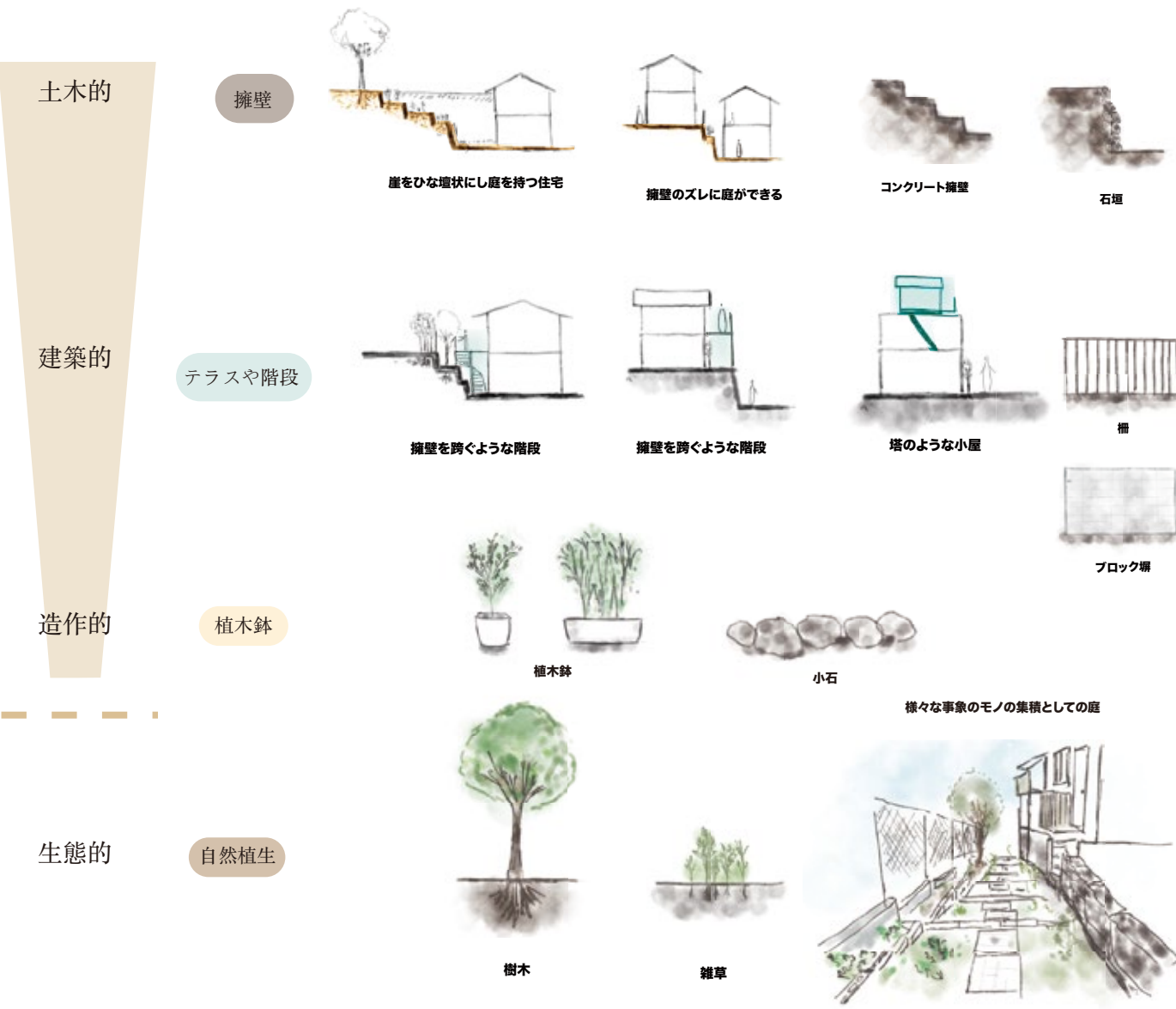
(2)閉じたオープンスペース-擁壁に囲まれた場-

神社・寺・小学校は宅地開発によって周辺に擁壁や塀が建てられ、閉じられたオープンスペースを作っている。



5 庭の構造-様々なモノを許容する空間

さまざまなスケールに置いて土地との応答が生み出す空間である



6 断面ダイアグラム 庭をつくるように作る

環境を生み出す擁壁・躯体



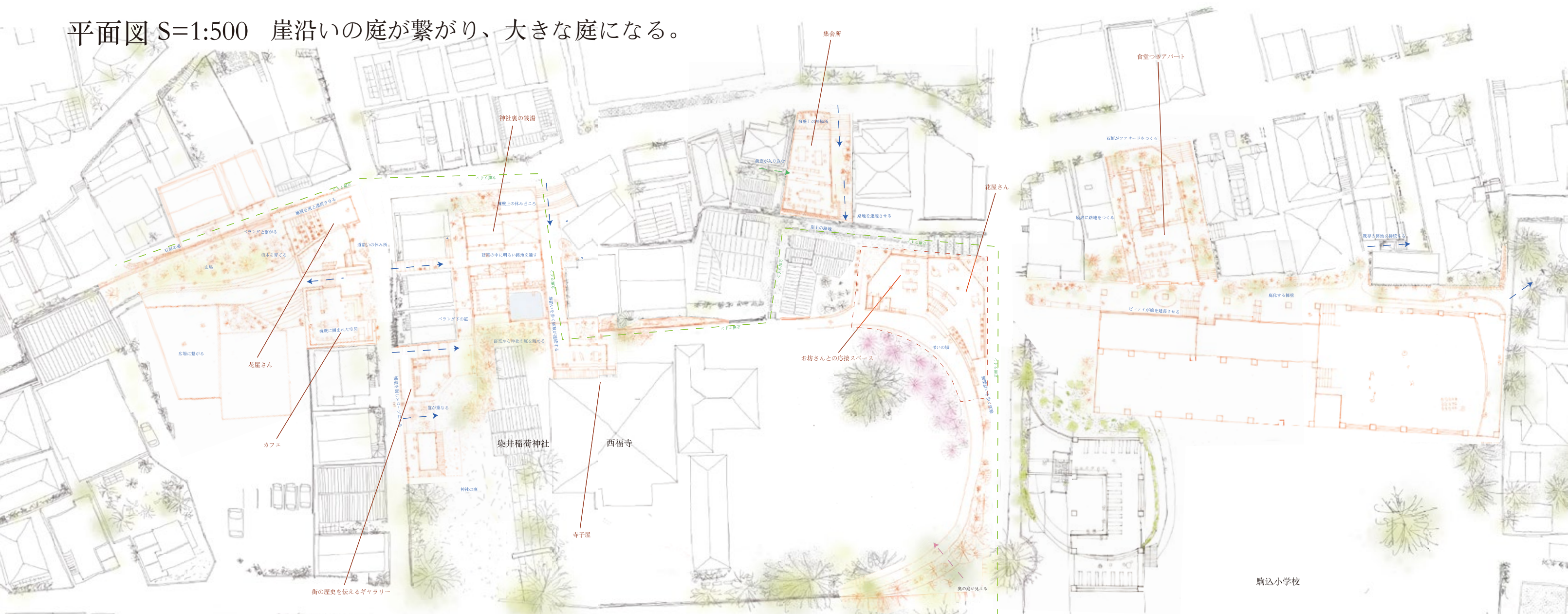
木造の架構をのせ、建築が庭に対して構える



家具が居場所をつくる



平面図 S=1:500 崖沿いの庭が繋がり、大きな庭になる。



平面ダイアグラム

1 住宅の裏庭をつなぎ、庭の経験を連続させる

3 崖沿いを中心に大きな庭を形成し、街の風景となる

2 つないだところどころに街の機能が入る



断面図 S=1:500

A-A' 花屋 擁壁が壇上になり、奥へと繋がる



C-C' 弔いの場 既存の環境におおらかな屋根がかかる



B-B' 銭湯 擁壁自体が空間として現れる



D-D' 食堂 持ち上がった躯体が環境に開く



